

魂のただ中で「偉大な力の声」を聴く人

(第一詩集『未知子』の「一輪の村」)

山本泰生詩集『声』

1

一匹の犬の死骸を胸に
少女が激しく泣いている
少女のあるがままの涙は
悲しみの銀
少女よ
誇りを持って泣くがよい

ああ優しい少女
滅びの風の洗礼を
許さなかったもののみが
深く知覚のうえに
悲嘆を燃やすことができる
忘れ物した先進国の
花びんに咲き出た
一輪の村のように

2

大学を卒業し故郷に戻った山本さんは、二十年後の四十歳の時に、第二詩集『川を飼う叙景歌』を刊行する。表題作の二〇篇の連作には仕事に就き多くの苦渋を経た後も、詩作を決して忘れなかった「たましい」の遍歴がある。ここには思索が詩行に積み重なってくる独特な詩篇が生み出されてきたのだ。

川を飼う叙景歌

——異質の変転を繰り返すたましいの内なる川を飼う

歌1

囚われない生きものの暗部を貫流する川
おおくの色と貌を被り荒れしぶき鎮まり
おぼろげな河岸を洗い絶えず変容を重ね
どこからどこへいかに及ぶかも不明のまま
時と拵がりの新しい地下室を打ちあき
いのちが計裏できると信じた日を浮かべ
安息の長い背骨として夜を取り込み
水底に大きな肉質の暗い穴を隠す 川を
今日もひっそり飼おうか

山本泰生さんは第一詩集『未知子』を東京の学生時代の二十歳で出している。二六篇の簡素な詩集で、その詩篇は徳島から上京した学生生活や学生運動での違和感、挫折感などを韜晦しながら語ろうとしている。しかしそれらの時代によって促された表現の奥底には、忘れられない故郷の風景が所々に露出してくる。詩篇の中でも特に「一輪の村」は、過度の観念性を殺ぎ落とし、その後の山本さんが詩作する原点になった作品ではないだろうか。故郷の村の「優しい娘」を書き記した秀作だ。この詩集を出したのは一九六七年で「忘れ物した先進国」は、高度成長を加速させていた頃だろう。山本さんは、高度成長から取り残されていく故郷の村を思いやっていたのだろう。そして「滅びの風の洗礼を／許さなかったもののみが／深く知覚のうえに／悲嘆を燃やすことができる」と故郷の風景を決して忘れてはいけないものとしての心の奥深くに甦らせていたのだ。そこで生きていかざるを得ない若い命である少女を「未知子」と名付けて、自分の詩作の原点に据えたのだろう。「滅びの風の洗礼」を拒絶する強い決意が感じられ、「悲嘆を燃やす」という繊細な思いがこの詩篇に宿っている。詩作を、生きる場所から自らの言葉で、誠実に思索しようとする特徴が垣間見えてくるのだ。

山本さんの住まいは徳島の吉野川支流近くにある。生まれた時から吉野川を見ながら育ち、今もその川とともに暮らしている。川の多面的な素顔を山本さんはよく知っている。だが、あたかも人の心の奥深くに流れている「たましいの内なる川」を、さらに激しく探究しようとするのだ。「川を／今日もひっそり飼おうか」という詩行には、故郷の水辺の風景を内なるものにしていこうとする、山本さんの詩的精神の徹底した姿を感じることができる。

歌6

いのちの輝く狂気と その不在の岐路を捜して
絶望の座標軸を登っていく 双頭のたましい
途上に迷宮は美しい門を開き転落するものを待つ
その後 真綿にくるまれ首つりを誤った
たましいは谷へ墜ち 流浪が低くつづく
視界は積雪で覆われ予期せぬ善心に酔いどれ
往きくれた黒い風やせた征服欲のふらと立つ 辺り
わたしの底にGへずしりと神にも紛う重心を置き
肉と血からひと一般の汚水を吐き出し
全きまで変化してみせるか たましいも凍てる川よ

故郷での仕事の中で山本さんは数多くの他者の欲望、狂気、悲哀、悲劇などを目撃したのだろう。その痛みが詩行や行間

に溢れているのだが、それでも「たましい」は凍えそうになりながらも、「全きまで変化してみせるか」と「たましい」の変化、展開力に希望を決して失わないのだ。山本さんにとって、「たましい」は純粹無垢ではありえない、多くの世俗の「黒い風や征服欲」などの試練を経た後も、「ひと」の根底に横たわる「たましい」となる深い精神性なのだと感じられる。

歌20

異端のじこを忌み嫌いながら溺愛する
たましいの不発 川を断つ重い不発弾 これらを
そつと撤去し 再び長い日と夜と夢を駆って
川のほとりを改修し終える
この一瞬にも
するするとのびる迷宮の川
わたしの御しえぬしづく川
わたしを焼かずに流すへ聖なる川を飼い
悪意と祈りの組み合う丸木舟にて
誰でもないへだれかへ渡ろう

あらゆる不純なもの、この世の数限りない欲望や迷いを呑み込み流れていく「川のほとりを改修し終える」と言っている。山本さんは「一輪の村」の抒情性を秘めながら、二十年

をかけて故郷の川である「迷宮の川」を、あたかも「へ聖なる川を飼い」馴らそうと試みたのだ。そしてそのような試みをする「異端のじこ」を「誰でもないへだれか」へと解き放そうと試みている。山本さんの「たましい」とは、この「誰でもないへだれか」につながるものであることが分かるのだ。

3

一九九一年に私は山本さんから第三詩集『生き感う』(詩学社刊)を初めて贈られた。たぶん一九九〇年に私が「詩学」で詩誌月評を担当していたからだろう。その詩篇には、生と死を真摯に問い続ける姿が立ち上がってきた。

生

巨きな死の盤のうえで
ぐらぐらして 変化する
断念と情熱をバランス
一輪車で きょうをでかける

過去が いきものを拒絶する
確かさ

死だけ いきものを虚構から
救えるのは

だが生きたい
死の倒立でも

死と闘うなど 妙な思い違い
生きるとは死から 逃げ感うこと

死ぬ 瞬間まで 生き感う
スペインの牛のように

そのまま 泣き笑い ゆらぎ
魂も

淡々と 生き感う 以外
どんな生きようがあるう

何気なく見回す この部屋の暗くした隅で
妻と子らのかすかな寝息がきこえる

(第三詩集『生き感う』の「生」)

「生き感う」という題の詩がないので、この「生」の中の「生き感う」という詩句から詩集のタイトルがとられたのだろう。詩「生」を読むと山本さんが詩を決して虚構の作品とは考えていないことが分かる。もつと切実で自己の固有の生を突き詰めた言葉を、さらに死を自覚しながら絞り出そうとしている。「死だけ いきものを虚構から救えるのは」という詩行から、人は自分の人生を生きていると思っているが、その人生は実は虚構ではないのかという、痛切であり冷徹な認識を抱いていることが分かる。固有の生が終わり、永遠の時間に入る死から眺めれば、人の人生は虚構であるが、虚構の人生の宿命を「淡々と 生き感う」ことに誇りを持つことの大切さを伝えてくれている。その意味でこの「生」という詩は、最も山本さんの思索に基づいた詩作であり、山本さんが自らの生と詩作を一致させようと試みた記念すべき詩篇であったらうと思う。

4

第四詩集『仮眠室』は一九九五年に出された二四篇から成る詩集だが、この詩集は自己の幼年期に立ち返り、自分とはどのような存在であったかを問う詩篇が多くある。「樹木医」という詩には、山本さんが故郷で自己を育て、見守っていた確かな存在への言い尽くせぬ思いが込められている。

鳥は空をきれいに切って 電線に立つ
犬は裏町を駆け抜けて 駅の前に立つ
人は何も考えないで 十字路に立つ
風はゆるく吹いて 噴水の側に立つ
樹は小高い丘に立つ それぞれを眺めて

樹のあなたは生まれたときからそこに立っていた
この永い時間 悠悠と暮らしてきた
外出のいつさいない重さや退屈を慰めようと
多くのものが見舞いに訪れる すると あなたは
かれらに笑いかけ 身体の精気を撒き
そうしてかれらがそが寛いで帰っていった

かつて 若者のあなたはみずみずしく
大裏の花粉を飛ばし樹液を滴らせ
颯爽と空の青を突いて 毎秒伸びていたものだ

あなたは幼い頃のぼくを憶えていますか
高い枝で夕餉に呼ぶ声を待っていた頃の

(略)

今すぐ 膺でもいい 樹木医となり
ぼくはあなたに輸血し続けたい
多くの鮮血を送り続けたい
あなたをこんなにして何ともない人々の

脂の雨に替わって

(第四詩集『仮眠室』の「樹木医」より)

山本さんの中で故郷の中の「永い時間」を生きている樹木が、その存在の危機によって計り知れない大切なものとして浮かび上がってきたのだ。しかしこの樹木は掛け替えのない存在の例えでもあり、深い拡がりを見せている。樹木の中の「永い時間」に向けて山本さんは対話をしているのだが、ここには身近な存在をゆったりと語ろうとする姿勢がある。自分の生がある限り、決して忘れてはならない存在を語り継いでいこうと願ったのだろう。この詩集のあとがきには、恩師の死を悼む新聞記事を再録していた。そこには山本さんがどのようなことを大切に生きようとしているかが誠実に書き記されている。

《かけがえない師が逝かれてはや一年になろうとしている。昨秋の今頃、天龍川を過ぎ茶畑を縫い、師の病床を見舞ったのが最後となってしまった。すでに意識は失われ、痩せ衰えたしかしペンだこのなまなましい右手を握り、寂しい無言の時をもった。その二日後、師はずかしく旅立たれたという。／(略)／師は倫理学・哲学の教授として、特にロシアのベルジャーエフ(キリスト教の実存主義) 研究で知られ、その発展に日夜取り組まれていた。こうした学問は自身の生

きた体験と結び合わせねばならないとの信念から体制、政治、教育等に鋭い提言や活動を繰り返されたものである。／性懲りもなく師に議論を挑んだが、生きることの核心は自ら答えるべしと何度も投げ返された。つまり、「身をもって哲学すること」を教わったのである。／(略)とところで学問の哲学など門外漢のわたしが、師の思想をどれほど咀嚼しえたかという怪しい限りと言うほかはない。ただ、長らく師に負われてきたわたしは、ひたすら問うこと、生涯にわたって「自由を問いつけること」がいつしか習慣になったようである。わたしの生きざまを掘るなから、自由の薔薇ならぬ詩が芽吹くことを祈るものだ。(略)》

「後記」にかえて——問いつける生涯」

一九九三年十一月十日・徳島新聞)

私はこの後書きを読んで、山本さんが師をどれほど思い続けてきたか、深い驚きを感じた。理想的な師と教え子の生涯をかけた関係がある。師の課題や生きる姿勢に、自らも近づこうと問いを発し続ける生き方がとても爽やかだ。問うことは、哲学の根本的な探求心である。問うことの大切さをこれほど明確に実践していた哲学者がいたことは素晴らしいことだ。この哲学者こそが、真の教育者であろう。苦しみながら、自ら答えを出していくことに、真の生きる喜びがあることを指し示している。このような哲学を身をもって実践していた

教師が身近にいたら、心ある学生には眩しくうつたであるう。そんな師と出会い、生涯、師と呼び続けることが、山本さんの生き方そのもののものだ。「生きることの核心は自ら答えるべし」と語る哲学者は、どんなに時間がかかってでも自らが問いを発したことに、自らが実践を通して答えていくという「身をもって哲学すること」の根本を語っている。

5

第五詩集『空耳』には二〇篇の詩が収録されているが、その中でも「ギター」という詩は胸に迫ってくるものがある。

ギター

——危篤の師T・Iの近くに

いつかは

こんな時も来るはずであった

赤や黄の最も鮮やかな秋であった

師の臥せる書斎には霧が降っていた

ふとんの足元には離れようとしぬ猫

机には人間の行方を問う多くの草稿

壁には波まで乾燥してみえる海辺

の絵が掛かっていた

書棚の隙間には古い傷んだギター

そのギターをわたしは忘れない
ジャングルでの異様な時を共にした
若い仲間たちの手作りだった

長い戦いが終わった八月のすぐ後だ
それは大きめで重く響くのだった

ずいぶん昔のことだが

酔ってギターとゆっくり揺れながら
低く歌う師の横顔を忘れない

恐ろしく巨大な力や強いられ方によって
全てが可能だった何でもするほかなかった
この痛みが弾丸のまま深く残る

「しかし人生 これでもいい、いいんだ」

と笑う師の潤んだ眼を忘れない

師は最後の病床で眠りつづける

肉体はただ寝息の箱のようだが

光を探る魂は今も苦闘のさなかのはずだ

師の代わりにギターを取り出し

あの歌を弾こうとして思わず抱き締めた

弦は少し切れ胴には鱗が入り

すっかり忘れられていたギター

わたしは両手で瘦せた右手を握り

ひとりきりの闇に包まれていく師に

聞き届けられないだろうが

呼びかける

「先生ご覧下さい、鉄橋です」

今 天竜川を渡ります

前にご一緒したことのある

南国ふるさとへの帰り道です」

私はこの危篤場面を書き記した詩を読むたびに、一人の人間が師と出会うことの喜びと別れの悲しみを記した最良の鎮魂詩だと感ずる。真に尊敬するとは、このように自己の生涯において同伴し励ましを得た存在者を決して忘れないで語り継いでいくことだと思う。師とは同じ徳島県出身であり、静岡大学で哲学、倫理学を教えていた石塚経雄だった。同郷の縁からの出逢いであったが、師として山本さんは敬愛し続けてきた。日本の哲学者と言われている大学教授たちは、西欧の哲学者の翻訳を中心とし、自らの哲学的な思索は二の次にしている学者が多いが、石塚経雄はそのような哲学者ではなかった。専門はロシアのキリスト教の実存主義者ベルジャーエフ（1874～1948）で、『ベルジャーエフ研究―実存的人格主義と弁証法的自己否定の倫理』（明玄書房）とい

う五〇〇頁を超える大冊の研究書がある。ベルジャーエフはイギリスのケンブリッジ大学から「第二のソクラテス」と称され名誉博士号を贈られている。ノーベル賞候補にも挙げられたが、政治的理由で実現しなかったという。私は石塚経雄の著作を読み始めるや、そのベルジャーエフをカント、ヘーゲル、キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガー、サルトル、ブーバーなどの哲学を論じながら浮き彫りにし、なおかつ自己の倫理観と対峙させながら実存的に思索していく文体に本当に驚かされた。借り物ではない、従軍した戦争体験を踏まえた石塚経雄という肉体を持った思想家が、二十世紀の世界的な視野に立って、人間の倫理を固有の実存を通して赤裸々に問うている文体なのだ。西田幾多郎の文体が、西田幾多郎の肉体を通して鍛えられた思索の文体であるように、石塚経雄は高貴な魂を抱えた、ひとりの哲学者としてその思索を刻んでいたのだ。『無の自由から真の自由へ』（大明堂）など人間の真の自由を徹底して思索した多くの書も残している。山本さんは石塚経雄から自己の課題を問いつけることの中に、人間の真の自由があることを学んだのだろう。生涯を賭けてやり続け、「人生 これでもいい、いいんだ」と言い切る存在に近づこうと自らの詩作に挑戦しているのだろう。

成度が高く山本さんの今までの詩作の達成であった詩集だろうと思われる。感受性と思索力が緊密に絡み合い、詩でしかないという詩片の連なりが次々に生まれている。例えば次に引用する「蝶」には、みずみずしい感受性が「魂」の深みに転換していく詩作の喜びが感じられる。

蝶

——あるいは 思いもよらない羽ばたき

* 時間が垂直に刻まれる 魂の溝へ

煌く〈今一瞬〉が深く沈んでゆく
とふつ 羽化してくる 蝶

立つて動き出す風
やわらかい息吹き 花のほころび

のどかに生きてあること
そのままにひたつていよう

* *

巻き込む風に 透けた紙飛行機

どうにも見えないものがゆく

どこまでも流れ果てないものがゆく

ゆれる巨樹の頂を越え

魂の空という 熱いフィールドで
生き生きと 遊び

〈ある形〉を求めて飛ぶ 蝶

生と死 タッチの差

命綱のない空中ブランコ

張りつめた不吉な魂から湧き出る 蝶

ことばも同じくそうある けれど
たとえ神などという名でなくとも

われらの底に〈涸れない地下水〉
のあることを喜ぼう

風が吹き抜ける 魂の森

いまだに半熟で生きている

奥まったところ 深い池の鏡のうえで

蝶は二枚の羽と化す

音もなく危うく直立しつづけ そして

絶えず何かに〈支えられて〉ある

おのれの有り様がわかる

〔「蝶」の前半部〕

「時間が垂直に刻まれる 魂の溝へ」という一行目は、一

匹の蝶の羽ばたく軌跡から、時間の裂け目に入りこんでいく
という不可思議な予感に満ちている。山本さんの詩とは、光
景の中のいたるところに「魂」を見てしまい、それを記述し
ようとしているのだろう。見えないものを観ようとするこ

とが詩人の仕事であるのなら、山本さんの詩は最もそれに相
しく、稀有であり、詩の志のとても高い詩作なのだ。出会っ
た蝶に「魂」を観てしまう山本さんは、靈感に近いものを感
じる資質の持ち主なのだろう。「魂の空」、「魂の森」に羽ば
たく蝶そのものとなって、「魂」の「おのれの有り様」を自
覚していったのだろう。「絶えず何かに〈支えられて〉ある」
という他者に満ちた世界との関わり方に、山本さんの詩は豊
かに羽ばたき始めていると私は感じた。「魂」を突き詰める
と〈支えられて〉ある他者を通して「おのれの有り様」が観
えてくるという、感じ方、生き方を山本さんは実践している
のだ。

7

新詩集『声』は三章から成っていて、I章は「時 詩編
地底 詩編、道草 詩編、触 詩編」の四つのパートに分か
れ、各編は一五〜二〇篇の短詩で構成されている

時

見えなくなつて何度かの四季
向こうから流れてくる 産声

昼

三十八億年 いのちの歴がひとをして
舟に乗せる

夜

ひとはだれも 深い想いの川に分け入る

どんなに喜ばしいものであろうと

苦しいものであろうと

川で溺れては 宇宙の爪につまみあげられ
百本の丸太のうえで生きていく

河

浮き沈みしながら流されていく 顔のないひと
ゆっくり はるか遠くへ流されていく

風と頬すりしているみたいな雑草も
空とじゃれているみたいな小鳥も
明日の糧に必死で働いている
痴呆のようでもまだ生きていられる ひとは

〔「時 詩編」からの抜粋〕

山本さんの詩作の特徴は、真つさらな感受性と独創的な思
索の結合から成り立っていることだと、この短詩から明らか
に読みとれる。「今という一枚の空間 この途方もない集積」
という詩行には、空間とは途方もない時間が積み重なって
いることを指し示しているばかりでない。地球上に生命が誕生
してから「三十八億年 いのちの歴」を背負っている「ひと」
の存在に驚いている。私は私ではない。生命の全てが私とい
う「ひと」に宿っていることに私たちは気付くべきだとい
う最も大切な認識からこの詩集は始まっている。山本さんの詩
作は自己を超えていく「ひと」という存在に語らせる詩であ
るのかも知れない。

山本さんは「ひととはだれも 深い想いの川に分け入る」という。自己を誕生させた水辺に佇み、「深い想いの川」を想起することを原点に据えている。「一輪の村」や「川を飼う叙景歌」を反復し深め続けている。けれども「ひと」は「顔のないひと」になって流されてしまう存在者でもある。その時に「向こうから流れてくる 産声」に絶えず耳を澄ませている感受性を「ひと」は持ち合わせているのだとも告げている。「風と頬ざりしているみたいな雑草も／空とじやれているみたいな小鳥も」という二行などは、山本さんの風景を見詰める視線の優しさがよく出ている。「ひと」の素直で優しい精神に立ち還ることの意味を「産声」という生命の誕生の声に象徴させたのだ。見慣れた風景も私たちの原点に立ち還れば、奇跡のように命の「産声」を聴くことが出来ると語っている。

日没

父という頑強なダムが崩壊する

それではじめて

わたしのいる風景に気づく

ゆたかな河が流れひろがっている

東風が吹いている

ことを伝えている。山本さんにとって詩とは、自分の命を育んできた生きているものたちであり、「豊かな河」のある風景であり、そこから響いてくる「命の声」なのだろう。父の塞ぎ止めていた責任を「鋭い報復」として引き継ぐことを決意していく。父の棺に詩集を入れる山本さんの感謝の思いは、詩を生きようとしているものだけができる行為だ。父は詩集によって燃やされて天上に立ち昇っていくだろうが、父の魂は「ちいさな木片」の中でいつまでも在り続けることを願ったのだろう。

Ⅱ章一三篇の中で次に引用する「耳」は山本さんが目差す詩への問いがある。詩にひたすら聴き入り、詩に浸っていき、独自の詩を生み出していく山本さんの詩作の秘密が明らかにされているかのようだ。今回の詩集『声』というタイトルが立ち上がったってきた詩篇であると考えられる。

ちいさな耳がある

耳だけがある

ほかに何も無い薄暗いところ

震えている耳

耳は聞く

しずかな ざわめき うなり しづき

天空の時の刻み 透明の矢の飛び

暗雲

確かめようもないが

死を待ちつづけたであろう父よ いや

父の死を待ちつづけたわたしよ 鋭い報復を進んで受けよ

詩集

だれも見えない隙に

父の棺のなかへわたしの一冊を入れる

喪主

父をちいさな木片に沈める。

(「道草 詩編」からの抜粋)

父の命の最期の輝きを見詰め、死を受け入れていく山本さんは、父への感謝を詩編に刻んでいく。父を「頑強なダム」に例えて、そこから流れる水が新たな命へ引き継がれていく

聞こえないくらいの声

というより生命以前の声

驚き 底流している

しいん しいん ぎうん ぎゅううん

ふしぎな耳鳴り

地球に生きる 三十八億年のいのち

いつぼんの弦が鳴る

一人分三万個余の遺伝子が音もなく鳴る

DNA 微細で美しい二重螺旋に

莫大な遺伝子暗号の書が詰まり ひそかに

読み解かれる声もある

びし びいん きりる きりる ぐる ぐおおう

声は永い一息

宇宙の吐く息に乗って

地球の途切れていない遙かないのちを息して

声から レプリカ

ひと一人

だから どんなに見逃されていても重い

そっと降りかかる いのちの声

澄みきった渦の声

抱擁する声

包まれて 生かされるこうふく

宇宙の独り言

偉大な力サムンクンシレイの声を聞き分けられるのは

本当は耳ではない

耳奥の深い沼

〔「耳」〕

山本さんは、私たちの耳が本当の耳であるか、という問いを発している。本来的な「震えている耳」があるのではないか。その耳は「天空の時の刻み 透明の矢の飛び／聞こえないくらいの声／というより生命以前の声」を聞いているという。その果てには「三十八億年のいのち」、「宇宙の吐く息」、「宇宙の独り言」を聞き、「生かされるこうふく」を感じさせてくれる「偉大な力サムンクンシレイの声」の存在を暗示している。ひとの耳の能力の可能性を徹底的に掘り下げている。「声」を深く思索しているからこそこのような詩作品が生まれたのだろう。本来的なものである「耳奥の深い沼」にひたすら耳を澄まし、「声」の奥底を聴こうとするのが、山本さんの詩作を思索する態度なのだろう。

*

魂ケイオスの声を聴け じつと聴け 聴こえなくても聴け
聴こえるまで聴け 声の時代ぞ

*

金属と石と風の街で

白い手の美しいひとに会う

きみと欠けた魂ケイオスは 白い手に引かれ

どこまでも笑いながら行く

今はまだ無い場所へ

第三章の連作「笑いながら行くひと」の最終連は右記のように終わっている。魂に「ケイオス」(渾沌)というルビを振らざるを得ない山本さんは、魂を生きている限り追求していくのだろう。「声の時代」とは、魂の声を聴くことから避けてきた時代が終わり、深い内面から湧き出す産声や肉声を聴く時代が到来することを予感している。そんな「声の時代」に相応しい詩集が誕生したことを喜びたい。このような優れた詩作と思索が融合された詩集の試みこそ、詩を魂の深みで受け止めたいと願っている多くの人たちへ、いつの日か必ず届けられると私は考えている。